２０２５年０６月１９日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２２頁

「悪」と対峙する物語

文人の武蔵野

村上春樹 ⑥

村上春樹の小説「武蔵境のありくい」は、住み慣れた土地を追われて武蔵野に移住することになった夏帆という女性が、違法行為に巻き込まれ、殺人を犯してしまう物語です。

しかし、夏帆の語りを信じて受容する読者の立場からすると、「悪」と対峙する物語に還元される構造をもっています。

夏帆を移住させたのは、雌のありくい（奥さん）でしたが、武蔵境の刃物研ぎの店「ときや」の店主を刺殺するよう夏帆に教唆したのは、ありくいの夫です。

「いいですか、あなたは武蔵境に越さなくてはなりません。それも今すぐに。そこがあなたのいるべき場所です」

武蔵境駅近くの商店街前のバス停。小説で夏帆は自宅からバスに乗り、商店街にある「ときや」に向かう（武蔵野市で）

というありくいの奥さんのお告げのような断言を、当初夏帆は怪しげなものに感じますが、夏帆の日常を脅かすエンジン音から逃れるための手段を示してくれるものでもありました。実際、移住後はエンジン音に悩まされることがなくなり、夏帆はありくいの奥さんに好意を寄せるようになります。

ありくいの夫の導きによって夏帆が刺し殺したその相手は、ありくい夫婦にとっての憎き敵（の現し身）でした。ジャガーに愛児を食べられてブラジルにいられなくなり、やむなく日本に来たという事情を知るにつけ、夏帆にとってのありくい夫婦は、もはや守るべき恩人でした。

武蔵境は、夏帆にとってもありくい夫婦にとっても、差別や迫害からの避難所として緩やかに意味付けられる場所だったはずです。

しかしその場所で夏帆は、「悪」と対峙し、加害者になるのです。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。